桂園一枝 雪

94
57
1

911.158
58
Vol.2 1

梅月堂景樹先生集

桂園一枝

聖華房蔵版

不破榮次郎氏寄贈

我師桂園大人月ころよみ給ひける歌のみ夜更て暑さも忘れて白黒わかず書給ふさまを見て此歌といふものは世にかくこそ松原静かに門弟に伝へ侍りて世の人にまた酒ありきこえ初て七月末つかた既に筆をとりしけるに自から思ひて思ひはかるさまに見給ひて梅の露いつしか葉かしら纏ひて尽ぬ

うへにしるしおく年来(トシコロ)よみならひし若年
綺言の余千歳(チトセ)の後までもつたへまほしくて
物しるしておもひつゞけ侍るを見る人あらば
悦(よろこ)ひ独言(ヒトリコチ)絵そらごとの實(マコト)ならぬ事も
こゝろえて侍るなり實(ジツ)に崑崙の千顆(コヽラ)
珠も是によつて見る人は阿佛(アカホトケ)のよ
みを侍るにやいかにそれ猿(サル)か見るも

物の中に撰(エリ)出て物の名をしるし申侍
侍るものをまつ讃嘆をよせて此ものを
しつかにそ束(ツカ)ねしるし僅(ワツカ)百(モモ)一(ヒトツ)ことは
猿の言の葉をならひ見て見るか
筆をもてこゝろをならふ捨(ステ)かたき
返(ヘン)くわう光を遺しつゝ見物にして
爲(タメ)に物をならふ者に書しる

和文(ウハフミ)は標(シル)し置侍んとするにはのかきとく
もらして藻層に梓校ふとの作のちとう
書すなへしと宣つるなりしかのすゝ
おの彼竊に摸国一校とす後をもす
まどと野ふ口を述のくすゝむと固志筵
遠近(ヲチコチ)我の及びら大毋くとく中和(ワ)
つくきとく書のことくは始つし

彼小梓として手(チ)ふり作よた後友だちよ
ことしむる之よ野に一冊(イチ)はよまいの人の
すまさけ侍の後ことに之給へんことを
改めよれし候へますの也文政十一年の冬臘月
於東賀茂の門にて観覧嘉亭に
源元鎮沙門 嘉等り謹てしるし津樹
に於てしるしぬ

源経文類巻之

春歌

御譲位あらむとせし年号春家の一云姫子

松迎春新といふ事をよませ給

今年よりあふくへき千とせ経む大内山のみねの松かな

春風春水一時来

氷とく池乃鏡を吹なへにそこや浪のもとをおくらむ

春水澄

常にしも濁らぬ春の水なれはそこまて清き山の井の水

鶯音知春

千早振神乃宮ゐ鶯の声すみくよりけさ東風そふく春やきぬらし哉

初春見鶴

松のはもかはらぬ色に群てあそふ鶴を小松の原に見つるかな

翔てそ春の長閑に消ぬ汀の雪の上の大空に鳴て千代ふる哉

妙法院乃宮にて何會始に東風暖入簾といふことを

まちえてそ春のうらゝかに見る

玉すたれゆくも風吹そめし外山の雪もとけそめぬらむ

雪消山色静

春雨乃入るさは浅き山里に雪きえて霞乃たなひく山の姿哉

子日

千世はみなかきりに小松原引つれて乃子の日乃遊ひなりけり

君か代にひかるゝ子日に松乃のこれる千代のためしに引なれし松

社頭子日

神山の松の千歳も引そへて葵のことく思ひなりけれ

子日若菜

祝なそへし松乃ちとせあまた七種のまつか若菜ハあまたとし

子日まつりしける人の家にてよめる

こ乃宿ハ千世ても尽ぬ松乃根のいくよなるらん小松ても

あら年乃春乃はしめのひまてゝてこのまゝ来

霞そめし比か白河乃こほり解てなひく袖も春をこゝろ

霞

朝きりを分ゆく河の末人河巻向乃檜原ハかくて春やたつらむ

かはらさる山はとふにて新麗こそそてつれをゆく袖もうつ

霞遠聳

大比叡やよそに見えはおくの山はなたかねの霞たつらむ

霞添山氣色

そるゝ乃見え人の峯の山の峯に[illegible]の霞たつらむ

野外朝霞

驚けるこそすゝ[illegible]かすみそ立[illegible]

海上霞

明る[illegible]見え[illegible]かす[illegible]立

鸎

うくひすはなく神の代よりしまた猶おほつかなかりける
やさしさてこゝろよく鳴ねをあたらしく来て鳴鶯

待鶯

梅も咲き去年鳴くるの日数はよそ鶯の声もまつる頃

鸎馴

我宿になれてなれぬる日は鶯のあきても鳴ねはなし

雨中鶯

鶯の鳴ねをきゝても雨にぬれてなくらん音もさらに

野外鸎

野はやすく鳴て鶯の声もさとはなれ鶯のこゑ

水辺鶯

河上の水藻の葉ならしに鳴くらしや氷とくらむ

暁鸎

夜をこめてなく鶯は明ぬ外の花くるや又りきそむ

毎朝聞鶯

わかれくに初音まちてもいれどあくるかすみや鶯の声

夕鸎

まくひとねつく山の木の鶯もゆふなきしてやゆくらむ

閑路聞鶯

あるひは出ゆしと思ふに陸奥はいでて雲ゐの鶯の峰

山家鸎

柴の戸のまへのにほひも鶯の声よりほかの山はへてなし

花間鶯

咲きみてる花にかくれし鶯の声のひまよりをなさくらかな

名所鸎

根岸なる清水のほとり鳴鶯の人家の鶯やなく

若菜

かすがののわかなつむらし人の袖の雪

摘ぬるも若菜のつむ宮ゐはかたの雪も思ひて摘むなれ

もしくにらむれどいひく摘みてつかむ雪中若菜也

佛光寺御門主於御會始ニ若菜知時といふ

年もよしせきもとむかし

霞しくかたもまた春吉野の山の峯には春の雪やふるらん

水邊若菜

河岸に摘ゆる若菜の根のみえかくれつゝ若菜

田若菜

春野ゆく袖も白妙の紅のすその山田に根芹摘なて

小山田に根芹つむしも紛ひの女かう袖は雪とく消ぬる

春雪

春の手にみすも紛ひの松のうちは雪にあはれ

山里の梅ひらけ初て雲の花に吹ならひ

殘雪

かげうつる山の春日に消残る雪もまだ消ぬ松の白雪

跡絶ぬ山里の松にのこりし雪は

餘寒

梅の花春とは鳴つ鶯の声もまたさむく

梅

行春のうえ乃さかりかなりしを折ても袖ハ匂ひにかわる宿
冬の宿乃梅のたち枝にまちわひて風をまた匂ふらん

梅度年香

やとりつる宿へつつ梅乃袖ふれし香さへ匂ふてちかはらし

毎年愛梅

春ことに家居をしめし梅乃花ちりぬともぬ春をまつ宿

月前梅

霞たちおほろ月夜の梅乃花色こそ見えぬ香にたとるかな

清月上梅花

さかりなる梅乃花はへてかけ清き月の影にも匂ふらん

暗夜梅

光見てぬる夜の匂ひにや春の夜の闇はあやなし梅の花

梅の香は匂ひ来ぬ浅き夜の闇のうちにもしるくなりにし

山家梅花

あくかれし山里ハ梅乃匂ひも春なれにし宿の来ぬ

柴の戸の人やまつらむ山かけの垣ねに梅の今さかりなる

梅香留袖

ちる後のこゆかしみて折はなる梅の色あやしく袖の匂ひまさるらむ

柳

なすへし柳の糸にむすほれて風も日暮てみたれてそよる

柳露

青柳の糸吹みたる春風にぬきもとめぬ露は玉ちるらん

夕柳

うちなひく柳の糸はみなかるれはむすひあへすて暮やゆくらむ

青柳もすゑのかすみになひきつゝ春もゆふへの柳の糸のは

故郷柳

ふる里はあれまさりゆくなかめにもたゝかはらぬは柳の糸

水郷柳

みしま江の春のさとの里の川柳色こそまされ水の春かせ

遠村柳

山もとのたかき森の青柳のなひくかつらふて霞くまの見れ

春草短

梅香留袖

おく浅のこゆきにて折はる梅の花あやしく袖の色へうつるか

柳

立そへし柳の糸もすゝ緑のなかまに風も見えてうちよ波

柳露

青柳の糸吹みたる春風に露も乱れて玉ぬきとめよ

かけてしく柳の糸はよりなくれはむすひあへて露や落らむ

夕柳

夕暮もまた霞こく遠かすむ都の空も見えかくれ行柳の糸

故郷柳

ふる郷の里は荒にしのふ軒端にもかはらぬ春は柳の糸

水郷柳

みしま江のうちえる里の川柳色こそまさりおりまされ

遠村柳

山もとにたなひく霞に遠くきる柳のなるへくかつふく霞のまよふ

春草短

道のべに駒ぞやすらふかげろふの門なきやまも蕨もえいづらむ

早蕨

子の日せし野の若菜の初しもひまなく折はえてかくて

早蕨未遍

みよしのは花ともしらず風さえて蕨は雪の下にこそあれ

春月

このまもる秋をまたれぬ月よりも春は霞にかすむ花のかげ

なつかしくおぼろに霞む月影は霞の月よりも初

春月朧

松むつかしも月ろくも吾妹子が橘かもみてねくさの秋清月

春暁月

鶯の鳴かなるかたになくゆかしき月のよの明

春夕月

あま家まではるかにみゆる山の端もかすみにけり月は霞

山家春月

世中はくやしと思ふ山里の月のかげもかすみてさらなる

柴の戸に隔てられたる雲の上の月やいかにと恋しかる絆

題しらす

枕木して行かへるらむ春をつゐにふみみるさき細江乃花の増むの

伊勢の海の千尋の底くれなきさ日も暮くれて螢の鍋

帰雁

はるかくも霧のなかにくもきえて花の香をも偏ゆへる金

花を棄て行かへる雁は偏りの花をも見すてけり帰る

草枕まくを暮すみ夜のきえもへ偏の花ふへ暮てゐる暮　言

深夜帰雁

春の夜の朧月夜に行かへる雁の声やたゆみ思ひなる

帰雁少

花をみる花の宿もかへるのきえも今は世にいへしかくれ

枕木あつまの年の雲雁のこゑをきくてよみける

春の花のかへるは雁の数々に消ゆなれや花も

すれしみの浦に細みつ旅のうちにもしてゐる

雲雀をあふき見る待ちのるる

松かし給ふは川の音絶えて夕霧立ちて山路に出でゝ

題しらず

さそふ人あらば我はつれにても春の日長き山路なりけり

世の中へよその人はおもしろき山路の奥をたづねきてこそ

前の右のおほいまうち君むすめ山の花御蔵人

ましみるかはいくはの花を袖たちへ世を経む

又の日わたらひの山家春をよめる

遊びけむ春をすみれしき百式の大宮人かすみつゝきて

櫻

たちかへり花や開くる中空にひゞく春風みゆる山桜かな

大空の月の思ひのくもまよふ花の香おもはゞ山はかすみて春を

みよしのゝ根の嶺の雪とそれは流るともあはれ白雲の桜なりけり

林中櫻

常盤なる松の木の間に咲く花は桜も雪の木の間の春

田家櫻

志づの男のかへるも遠き小山田に春の夕くれ見ゆる桜かな

山花未開

うちつけに霞わたれる春の[illegible]山桜の枝

尋山花

尋[illegible]はい[illegible]

尋花處不定

[illegible]

霞隔花

[illegible]

花似雲

[illegible]

曙山花

ほのぼのと[illegible]

遠村花

[illegible]

故郷花

[illegible]

故園花自發

いにしへも大宮人にまさるらし春もてはやす志賀の花園

関花

あふ坂の関の杉むらかすめとも木間あらはにさくらかな

社頭花

ちる花をさそふ嵐も神垣の花もむかしのこゝろにて世はなく

河上花

大堰河のなみの花見てしらしもはや宮このさくらちる花

花交松

咲きる花嵐の山を見わたせはいろもさかなき松さけけり

花有開落

咲ふ花もなほ山の末にちりてもちらぬ咲てやひらちる花

落花

みる人のおもふまゝあはれにてちる花のゆくゑこそ初條事

夕落花

梢ゆく風も枝には色はちらてかゝふるけはひちらぬさくらし

落花浮水

流なくはやき瀬のこゝろともさそひてや花の浮をうかふ瀬

池上落花

池水の底まてすめる浪のうへにちりてかさなる花のしらくも

花落客稀

花ちらましは春てひとまれの人をこそありとも思へ美りける

暮春落花

限あるましはとおもふ風はれ雲よりゆくへは見えてちる櫻の花

萎花蝶飛去

こゝろさへ花をさそひて見てはてふのはかなき風やさそらん

殘花少

たえてたに南まくちる花の世中にのこるは花をすくなからまし

人依賴子花有喜色

まちまちてみなうれしきはゆきまよふ思ひほかなるさくらの花

志賀山越

逢坂のなかれのまよひなからもむなし志賀のやまこえ

江山春興多

松かねの江に入江乃松にかゝる雪は花乃山のはるゝ移り来

あらし山乃花さへすゝしとすゝめて君は

亀山にはる〳〵ゆくるひ咲く咲花世乃まゝなれ

大堰河はしるをくみて代々花をもちに入ゆく花の香る

麓早やとまく

かはらはいつはるまてハ見人あはれる緑月乃花をかはは

まて雨の花おもふ日は

あらし山流れてもとの色にゆくはるゝ花さへもなかれてちるゝすき

清水寺の花は花見の車にて侍る時

いにしへの花乃木さくみちの車やとらぬ雲の花の月

照月乃影ゆくみちは山さくら枝にしくかけいはゆちらす

遅日

はる立る山人は洞乃うちかくてはるゝ宮乃雨かな

松かそう幾年ふかく行く春てもみえて雲の日影かな

題しらす

かすみのあくかれてかけろふのあそふも見えしくれ風そよく

燕来

かへるさも夜のまてあはれ忘れても又来る春のつはくらめ

苗代

をやまたにせくはしつか水まても床もみなくちに苗代のまけみつ

雨後苗代

さなへ時の日も経ぬやまたの苗代水のうへの緑かな

款冬

山しろの井手の玉水くみし人つらし山吹のさかり

岩の上に流もよるまても咲くうつる瀬の山ふきの花

河款冬

花ならは清き瀬ゝの岸によるも清き瀬に立ておなしく山吹の花

雨夜思藤花

よもすから松のしつくもあはれ袖ひちぬれもひなからのゆかり藤浪の色

暮春

ちる花をまてしはしまて色深くのこる春をきみのかなしむ夕くれのけふ

賀茂川のほとりにて人々よみ侍る河暮春と
いふこゝろをよみ侍る
ゆく春に流てはやき浅川のみなかみへ流くと思ひやる哉

夏歌

題しらず

梢には残る桜の陰よりも来ぬまでと花の盛はいつも思はる哉

卯花

やまざとの垣根にさける卯花は隣まてさす月影なりけり

卯花似雪

山さとの夜風たえてしかりきをあやめく雪にまかへはてけれ

夕對卯花

白妙にさけるうの花ころもこその夕はえて衣手はなりにけり紫

卯花隠路

うの花の露にむすふとの山陰流るゝ道のたもとしほるすれ

山家卯花

郭公なくや卯月の山さとのつまとなる人もたえてふる宿のかきね

葵

神山のみあれのちのひかけまつかけ門を待て二葉なるらむ

葵露

けふひさす日影もなひく心よりさしてや千代の末まてなほ露

郭公

わくらはにまつのはの声残るなき人やきゝつらむ

あかつきの山のはてにいまはたゝ鳴ねもきかぬ夜半の郭公

尋郭公

粟田山松のはをこゝにしるへせよ郭公なきていかにほとゝきすなれ

待郭公

ほとゝきす山のはまてそまちわたる年かはるまてひとりなかめむ

かくきなかしゝハ人しれすの田舎に来れ枝戸しと鳴まつかな

八重むくら宿の夜半にてやほとゝきす向ひてふしぬるはしまくもかな

與女待郭公

妹とわかぬふりすみれ一声は旅ねしてや惜む涙を流しそれ

遠聞郭公

郭公鳴なる方を見れハなかなかにしのひ音れてたちそ見れ

月前郭公

ほとゝきす月まつよひのまつほとも山郭公有明の月

郭公なきつる方を詠れハたゝ有明の月をのこれる

雨後郭公

夕くれは雨のなこりを見せつゝ山ほとゝきすなきて過る

郭公一声

時鳥こゑの行ゑを待わひてたゝ一声に覚ゆなる京

五月やまちの山のほとゝきすなひ一声鳴て過

郭公過

ほとゝきす鳴のこゑは山にきて心や君をまちかねつらむ

野郭公

むら〳〵となくねは何のまつゆかりよき里をはなれ松の村立

関郭公

夏やかれ打わたるひとこゑにかよふらん志賀の山こえ鳴ほとゝきすかな

社頭郭公

あら川の山田の原のむらとなく声はさなから思ハ神もきくらむ

郭公稀

初音哉一声嬉しく待わひし山ほとゝきすまれにきくかね

郭公晴山

時鳥ひと声ふけし嶺なれや世をはるかにも峰ほとゝきす鳴や山の名をもきかむ

菖蒲

いやかをくらに乃のさく事遂沼のあやめのひかぬなき哉

刈ふきの軒はつかしきあまり浅沼やあやめ根のなかくもおもひのやとる哉

深菖蒲

信乃ねはさくわか身をやまとま松も世を経しさし来らむ

盧橘薫袖

きちるれ乃またつれもなく衣かへたる袖つゆもなくぬれ
身にしみばいるせもにも猶のこれもちるらん袖り風の吹らむ

五月雨

降つゝく今はいかに人のかゝる来るまて久しからぬなつかしき
まつ人の袖かへぬとや軒にわつかに昔を慕ふ月さみたれの比

五月雨欲晴

五月雨乃雲のたえまに山の端に出るやまひもあるなにかゝる

五月雨晴

みよしのゝ瀧はいまたこゝろなれの峰も高ねちるまて青海の原

夏雲

松はらや風に吹上の麓に白雲のなひく夜の峯にかゝれ

夏山

夏くさよしけりにけりなかくれかなの雲のかゝる下ゆく山
六月のそよくもりしもそのよそにも峯は夕の松

夏衣

かきつくるゆく夜の衣やおりかくるも人の袖はうすくそはおれ

水鶏

竹垣の隔てゆへてゆく暁におどろかされて水鶏なくなり

夏月

さはかねど寝ぬ夜の鳥も一声はやすらふ月の影ぞ更ける

夏深み木の下道は分るより月の光ぞすゞしかりける

樹陰夏月

すゞしくて秋かと思ふ木の葉の影は隔ても絶ず月ぞ宿れる

題不知

大空は月もさなから夏秋はすゞしくみちぬる影ぞ浮かして

夏むしのほのかにみえし蛍の影ならで明ける夜半哉

夏草

蓬生は庭のあさぢにおひ茂りうちしまてそ人まちし哉

風前夏草

風の音は秋にかよひて糸なれば末は夏野の末葉もいはへく

河岸の柳しけりのや風吹は波さへよせて涼しき人哉

夏草露

法の泥蓮の末はすく風に夢さもこゝろにかゝる月面影露
姑峪乃ふひの野き迄秋の夜半もわくれは志らふ露こそ知れなけれ
　にしふあうふ降時雨野に長草とふ事は
思ひは野けき人の身も夜涼し今さく千代乃花のうけまへし

題しらず

ふる風に法のくみちりし津國の難波のあしハ今もかはらじ

鵜川

末河をわたく篝火きえ淀むるの数々なるとて頼むなり夜半

名所鵜川

河つらやあらさりけし河よそ行つ鵜も心つ身を沈めきまけり
出しくもうすき流るゝ長柄川なかきへ世て思はゞ世を思ふに

螢

陽炎は闇にまかる夜野の清水よ流るゝ河氣も螢なりけり
夏来ても人の見すかる身やの門乃桜井の下にほる光なれ

雨中螢

古枕にる軒乃まくらハあはる秋の夜もすきに遊ぶくるふハ螢の影

深夜螢

小夜ふけてゆく螢の影見えしは今ハ空に越ても消るに消

洞底螢

あかるあたりに深く箱根山をゆけハ谷の底なる螢

螢照水草

夜川のこゝろにもえてみなそこの藻にまよふ螢もしるかなる萱

風まふ池水のおもてに乱て山さハかくれとふほたる哉

海邊見螢

芦辺よりほのほの螢のかけはみかかるみ汐の浪にとふほたる

蚊遣火

いとやすく寝もせぬ床ハおくかやりの煙にむせつゝ

奥山のむかしの炭木たきつゝかやりのやうになす夜半哉

夕立

とふ雨を過て降し雨も夕立ハ空まで雲て雨はれぬ人まち

ゆふ立の雲も宿の峯に出て遠く過るゆくそいそに雨ふる哉

夕立早過

あま雲にもゆふたつ河雲わたる夕立あとにあらく流れ行なり

湊夕立

茜さす日もてりながら白菱の湊よりかは風さそふらんあらし

夏浦夕

うら風に夕涼しくは来宿る海人の苫屋にほそき夕顔

扇

草も木もそよがぬ秋の風をしてあふぎの袖にやとりて歌

閨中扇

今はとておく袖やの扇のわすれやしほれたるらん

扇羅風生竹

涼しさはならすあふぎの風と思ふまにそよぐ竹にもはなちぬ

避暑

夕川の波に涼む世をのがれあつさをいとふ袖のうちに涼しさ

泉

立よらぬ人もむすばぬ山の井の清水にむすぶ夏の夕ぐれ
山の井の水のあさくもあらぬ身にいかで流れの絶ざるかな

泉為夏栖

せつくれにしよ影やとせくあかさて清水の流に身をすます哉

曉風如秋

みな月のあかつきかたのすゝしさは吹かせまつに立かへぬ秋のこゝろを

納涼

ゆふせみのなく時雨は八重むくらすゝしき袂はそよく松風の色

やまのはの苔の岩井の清水くむ人もまつたえぬ心すゝしく来ては哉

江上納涼

よる浪の玉江の月はかけしくも涼しさ流まさる江の花

河邊納涼

川上やよるへの岸のはにすゝしくてさそふ夜の月の風まつ

松高風有一聲秋

わか宿の松ある庭に吹大空の風をあきとも誰かきゝそめし

夏神祇

清かみとも神の心を涼しくて涼みつゝなかす御手洗川や瀬々かな

六月祓

夜川の淵も瀬となる恨ともきまつのこゝへ誰かおさん
いきてかすし現にも涙の我身の日を経てかくる白浪

秋歌

初秋風

今よりは風の涼しさのつてを思はゝ露や袖にをきて知る覧

初秋露

行影の夕暮秋をもて見るは露も風もなれ行露のみそ

むさしのゝ尾花か風はいつよりの宵にこそしら露の露も置来覧

秋来水邊

今よりは見る人も夜のさ水のかけに吹来る秋風の立そめしなる

題不知

幸いへのまてあくけふの箱根山のえもきやまつ侍
うへは色こそかはりもしらぬ杦の秋の紅葉

七夕

雲のくにせ逢ことなし棚はたのまひくるれは君に逢見ん
棚はたの衣の衣を夜かさねてや秋のよつゆを

七夕雨

小車の牛のあゆみの一年にたえてあはてしたち待らむ

晴わたる雲のはれ間は今年もとめ逢夜の程そなからし

七夕船

けふよりの年の波をわたりし葉をまたぬ舟

七夕後朝

一とせをまちしわかれは悲しくもたちかへる袖ぞつゆけき

海邊七夕

まつかけの塩くむなみに人の海人のさすあまの苫

羇中七夕

雨しらかくふ下ゆくかさやれハ星合の空に袖ぬらしけり

憶牛女述懐

名をたにもかけしふるさと遠さかりて頼しくハかつ〳〵せめても思ひ出む

暁萩風

置露ハあまたの床ならん風にふかるる秋の夜の夜寒に来て萩の下ハ露

外山おくすみける秋の夜しるし秋の夜人なき

夜の秋の嵐に人まれなる庭のまかきの風に吹く萩の花の風

萩

露深しの花の葉にふりしきるの秋をしる下葉の袖にこほれ置

ひとよまや音するなけるは露乃織つむけはしも萩の錦なる哉

高臺寺に萩見にまかりて

あたなる風にみたれて錦の唐衣きそらするみや秋の紅葉

薄

紀乃浦ハ野邊の末の尾花に吹かれ行くらし風そ乱れ

吹つまる野中の道もやほそくハ風に吹かれまよひの宿を招き

秋の夜よ露の乗を乞よくせつて寄する袖ほしまねく花なき

薄随風

あきよりもひさしきそてもつゆふかくまねくすゝきにみだれけるかな

行路薄

旅人の袖とひとつになりぬらむまねく尾花のすゑの秋風

薄似袖

招きてもしらぬなかにはまねく花尾花が袖のしらぬなかなれ

刈萱

かくはかりかはらぬやまのみなからんのはらをはらふやかまのをはな

刈萱乱風

かるかやのみだれて秋の風ふけばいとゞやあきの色まさるらむ

庭栽野花

いろいろの花のちくさをうゑてこそ野をも庭にうつしけりけれ

槿

露まつほどもはかなきあさがほの花ものいはぬ秋の初せ

槿花未開

暮をまつほどもあさがほのさかぬまもはかなき花のおもかげ

露

秋風にはらく袖は思ふ篠原一葉にむすふ露の宿る色

草葉にも見えて秋の衣の露を詠いかに思ひなしけむ

草も木もをしなへてかの露見れは人も袖をや思ひしらまし

露脆

はかなしな心のうへに見えつる秋萩も枝をはなれて心やすなれ

庭露

志なれはむすふ露を数ならて一夜みせつる庭の朝露

荒庭露滋

あさちふの野辺とはいつの昔より露をわけ行く宿のあれ

枕邊露

秋萩の末の夜まくら志ほれつゝ露にひたすら袖そ露けき

虫

鳴むしの聲はかりはや秋の野を尋ねつゝ思ひこそやれ

よれわかいふ夕の空思ひしと書てる虫の鳴そめける

聞虫

更ぬれはかつふく月にやとりして命なき虫の声そかなしき

枕上聞虫

むしの音のさきこ夜すからに枕をそへてまたしらぬ秋の袖の涙

閑庭虫

蓬生の露のしけさはなれきてそふ枕にかなしくらむ

叢虫

八重葎ちさきみつたれ露をはらふ浅茅か虫の声あかぬ

たやすくも松虫の秋のむしにはあさちにやとる虫の声哉

みさはにて宮城野しのふむしはしけにやはり我身の世のかな

松虫

秋のくる千年ふるなのむし松虫の聲まつそうる枯すまれ

鈴虫

ふりすてなくよ声のあはれに鈴虫のあかぬさへ秋哉

秋田風

おとろかすさへふくらし井川の行田の秋風そふく

故郷秋風

身にしむ鶉かくまて吹そふたかまのはらの野への秋風

題しらす

実哉さくらもみちくハいろまさもまさりゆく秋風そふくらん

旅夕

わかきちハ袖の露とはおきぬらむ夕暮にさへやぬるゝ袖かな

いなをきし萩の上風吹よせてまたくれなゐのはらの我

関屋秋夕

旅人の涙くりハさゝすらね関のまつやあらきのねふされ

故郷秋夕

いにしへを思ひやるのすまひし昔にかはらぬ露の夕暮

田家秋夕

山端浅き羽田の里のさひしさは風も人も来ぬ秋の夕

駒迎

逢坂の山の杉むらに分ゆく霧のかくしたくひく駒の綾

雨中駒迎

雨ふりて人の袖ぬらす夜の駒ひきていそく駒ハ甲斐のみ思ふ駒

稲妻

ゆふ山のまさきの末の間の稲妻に鳥羽田の面の露をみる哉

秋雨

わか宿の庭の荻にはいくとせもしらぬ秋の降日は世をくやしかりける

山路秋雨

雨ふらく木わかを袖をすゝる山露の深き袖とはなにかゝるかれ

旅時雨

長月のすゑの有明に限りなく旅の袖にかすへはなをしほる時雨

月

大そらをうち雲なく秋なれやすむ月の影は世につきせぬかな

闇をぬく常にはなくて晴月をまつは衣をぬる人はあらしとそ思ふ

雲間待月

はや月も今やほのかに出るとも大空にまつ雲のたえまおそくかれ

愁人對月

思ひあまれは袖をあふくて大空の月の光そわかかはらぬ哉

對月待客

来む人も何すゝ今夜さへあからむ月まてしく思ふなくく松の戸

深夜月

物おもふ身に稀なれ我宿の窓を明らく更けゆくかたぶく夜半の月

閑夜月

あはれさへ夜ふけて音絶えすむ月に音する物は松の風吹く宿

暁出月

待ちわびし月の出るを思ひねのよそにやみてもなほあかぬ夜

獨見月

やまひしく月しも見しを思ひはまさりて泣くわが袖をぬらす人ぞこひしき

今さらに詠むる獨りの二つに見てあはれ昔の秋は月やいかならん

月前風

更くる夜の月もさやけに嵐ふけば袖にもやどる秋の露哉

雲収月明

山の端に棚引く雲の晴れ白雲の今は空いつも清けき照る月

山月明

嶺高く雲もはれぬる山松の影さへしるく秋来の月

山月聞鐘

高砂の尾上の月やふけぬらんすみまさるなる鐘の音すなり

峯月照松

ゆふ日さす尾上の松の宵月に光のこれる峯の松かせ

月前松

松陰にたちよりて見れはしらしあかぬ月の隈なき

松間月

浦かせの松の木間の月影はよそに見えぬる秋の夜の空

松月夜深

たかしらぬ妻よふかき山の松風にてらされてわかのかけ月

月夜聴松風

詠月にこと浦に聞ゆるさとのなかめて峯の松かせ

竹間月

くれ竹の一夜をまつの風にてもかけにゆく露の月

月前竹露

呉竹のはしにあまる露月の影よりおくにしくやある露

月照流水

紅葉の色も秋をば清やかにおちくる遠て河瀬の月影あれ

八月十四日終夜月はいさやなかなかの空の月

峰の上の月も宵の間そまつ入るをしらぬ人の影の世を見

十三夜月

曇りなく今宵の月にしらるれば今宵もさへ人の待つらん

十五夜月明

今夜こそ清くやはらか月の光もやとるまたさへ見ん

雨降宵月

立いでゝ見しふるさとの秋の色も嵐吹く中の秋の夜の月

故郷月

波のよる滋賀の都の秋の夜もさぞ大津の宮の昔恋しき

月前思故郷

いつくもの月はかはらぬ旅の空に都をさへも思ひ見る哉

水郷月

橋の上に清き月影さやかにて旅人の今宵もそこに流るゝ

田家月

いなばしく露もろともに袖ぬれてさびしさまつ山里の煙やゝ疎

閑月

たれすみてまさる月もやかへりけむ人の音もせぬひとりすむ庵

関路月

浪路ゆく月はさやけき関守も夜はまさりてまつとこそきけ

浦月

有明の月ものこりて浦の夜半あかしの浦の須磨の浦浪

九月十三日あかつき閑院へまかりける人のもとにて

雲なき名にへば浅ましかたみにも有明の月入て来年いかに人の鏡

病にやぶれ侍りける年なれ十三夜に

あきらむ幾とせ思ひしも今月をことしの月も此世でみし

月前萩

露しげきまがきにつゆの花萩の下葉まで月は宿れし

月前菊

たれを待ちてまがきに菊のうつろへる霜にしをるゝ花の香ぞする

月前鳥

照月乃かけをうつして義をも庭にみゆらん宿もしらなくに

月前船

海もちかくみねのあらしの沖津浪に舟人いそく月やなかめむ

月前笛

聲すみて月に吹ぬる笛竹は秋のよすから中やさへ給

寄月ノ釋教

真浅き心をかけてさえわたるまことはかくも鷲の山端出る月

三熊野のうらに

みくまのゝうら漕舟のゆくゑしられぬ濱に月影
雁乃聲に雁鳴きわたるなり

新玉の光にかすむ夜もすからくまなき空に照わたる月

雁

雲ゐゆくねをのみなきて霧の上に聲をきくにも秋の夜ふかき

風前雁

秋風のふくにまかせて遠き夜の空にきこゆる初雁の聲

山もとの浅茅にまよふ虫の声もたえてはなほ秋ぞかなしき

夕雁

山端のよそにはちかき夕暮の空をはるかに行雁の音

山家雁

やどとひし垣ねの萩の花をさへ涙そふらし雁の声かな

旅泊雁

旅枕ゆめはよそにて名残ある浪の浮寝に鳴てゆく雁

遠山霧

遠さかる山もとやとし山霧にまかせて遠き秋の夕くれ

橋上霧

うちわたす宇治のわたりの橋をさへ霧にへだてゝ行やかへらん

林間霧

朝霧のはれゆく梢にしられけり色まさるらむ神なびの杜

関路暁霧

相坂の関は秋霧たちこめて志らぬ人こそ行有明の月

河霧

河つらに吹かゝる峰の音たえせよとや消んとおもふ

遠村霧

山崎やわたる森も朝霧に絶々見ゆる桜井の里

擣衣

やまかはの秋の夜寒にころもうつ声すなりまきの峰の鄰

小夜更て音そ絶せぬ秋風の寒さまして(も)おもふよき鄰

暁擣衣

有明の月よりも声うちつゝけぬる旅寝の夢をやふらぬ

山家擣衣

まつ山の木の葉のみか唐衣うつ声家の音そふる哉

海辺擣衣

かねてより来る衣手うちぬるゝ三保の浦の沖津浪の声や衣うつらむ

旅宿擣衣

旅ねする夜はのまくらにかはる里にしるやしらずや衣うつらむ

鴨

冬の夜に鴨の羽音のさえて聞人のすむすみかなれ

澤畔鴫

ゆふされて時雨もそゝきし大沢の池の月には影もさやかなり

伏見の沢のほとりにたつ鴫の羽かきしけき秋の夕暮

故郷野分

古郷のあれし垣ねをふきすてゝ(?)あれまさるらむ秋の野分に

宮の御會に重陽宴といふ事を

さかつきにうかふる菊の花の香を酌うけてや千とせ山路の菊の露

菊露

置そふる花の露にうつろふまてむすふ露のよにもねらぬ

菊花久

霜しもをおきてうつろふいつまてもさらてしく白菊の花

菊開中友

秋をへて白菊さける庭のまかきにまかはぬ友なる菊の宿

菊制頽齢

手よせて老の薬ときくなれはしら菊の尾上わたりてのこる白菊

老對菊

ほかやてかつ由やさて秋萩の露いま咲ぬともけさそ見えむ

菊映水

いくちる駒もきんとほ川のはまちつる白菊をも

題しらす

吹風の身にしむ比にあきそみ草木も秋やめて物思ふ世

きみをそ思ふ花も色にもをくもらむかむさらぬ思ひ身むかし

尋紅葉

山のおくはるきそ秋をまあひに年わ深くて紅葉やちる見むし

紅葉浅

さくら川けるつゆをけるわ秋深くも雨て杉のむら立ちさ色付ぬなれ

みなおもに錦もきえんとも紅葉のはさいぬ涼しき濃染なれ紅葉をあかく

松間紅葉

山里は末のまに見えし松原年を秋紅葉して色さえにかくしてもはわか世

松かえをかくさて紅葉をかんして大原の色さかまの山で色付紅葉かわ

わかゆる因由の御白や一年ある紅葉の色かはるわれを

白の孫のかけよ見えんはしころ見えて紅のおもか

雲井にもけふきてかはる八百日ゆく浜のまさこをかそへされ

とをつへぬいつも枝に綿をやそてかさねても人やなかき

をみかきの色をかへぬゆへにはちよまてのまてゆくらん

題しらす

鴫のなく夕暮の秋をかれぬ木末まてまつはなれゆかぬ

時雨にかはる露はうつろふ野への草よ日数もおくれぬらむ

暮秋

行秋の限を知るかおもひよわる秋の名残をはしれける

暮秋霜

まよはれしかたみにてやこゝろの長月乃有明の月ハ霜やおくらし

詩歌 部
No 1
昭和 年 月 日